

変える・守る・育てる・創る

第18回

女だからの経営論

取材・文 三好 かやの



西馬きむ子さん

(有)ヘルシー・ママ・SUN (兵庫県・神戸市西区)
〒651-2334 神戸市西区神出町紫合74-5
TEL078-965-2456 FAX078-965-2460

Profile

にしま きむこ 1945年神戸市生まれ。農協在職中に、正さんと知り合い結婚。その後義父巨さんと共に農業を営む。82年、正さんが農協を退職し、専業農家に。本格的な無化学肥料・無農薬野菜の栽培を開始。地元の生産者と共に「神出有機栽培グループ」を結成。91年その女性会員11人集まり、「ヘルシー・ママ・SUN」を結成。近隣の消費者と積極的に交流を続ける。そして、97年7月農作業を体験できる会員制宿泊施設「神出オーガニックコテージ・グランメール」設立。消費者との交流や活動拠点として、新たな活動を展開している。水田45a、施設60a、採卵用鶏300羽。家族経営の(有)ヘルシーファーム専務(夫が社長)。(有)ヘルシー・ママ・SUN社長(夫は支配人)。

うちらみんなの
おばあちゃん

「おかえり」

神戸市西区に設立された、「神出オーガニックコテージ・グランメール」ここに一歩足を踏み入れると、まず目に入る木の看板に掲げられた、この言葉が訪れる人を出迎えてくれる。初めて来たのに「おかえり」。それでもなんだか懐かしい空気が漂っている。「グランメール」いうのは、フランス語で「おふくろさん」の意味。でもみんな「おばあちゃん」って言ってるけどな(笑)

と、このコテージを運営する女性生産者グループ(有)ヘルシー・ママ・SUN社長の西馬きむ子さん(52歳)。

西馬さんらが農業を営む神戸市西区神出町は、神戸市内の中でも、地域振興のために、市が農業地に指定した地域。近郊農業の拠点として、水田や畑が残っている。

約30年前に、故郷の農村を離れて都会に出てきた世代の子どもたちが、家庭を作る時代に入り、親も子ども都会育ちで、まったく「田舎」や「農村」を知らない。「田舎のおばあちゃん」のいない子どもたちが増えている。

「そんなら私らがみんなのおばあちゃんになりましょう。ここは実家だと思

つてもらえばいい。そやから『おかえり』なんや」

元々ヘルシー・ママ・SUNは、神戸市内の消費者グループに、無農薬・無化学肥料の有機野菜を販売するなど、積極的に交流を深めてきた。消費者との交流会は、その都度農協の倉庫などを借りて行ってきたが、かねがね独自の活動拠点がほしいと願っていた。

そんな折、神戸市の神出町が「人と自然の共生ゾーン」に指定され、宿泊施設建設の話が持ち上がるが、95年突如として起きた、阪神・淡路大震災のため事業は頓挫してしまう。その後再度この話が持ち上がったが、市からの予算はカットされてしまい、国の補助と足りない分は、近代化資金を借り受けて、総工費8200万円をかけて、昨年7月、念願の「グランメール」が完成した。

ここでは、一般、趣味、就農、の3コースに別れて、市民が施設の周囲の畑で実習を体験し、宿泊できる。技術指導には「ママ・SUN」のメンバーが当たり、食事は自炊となる。就農のコースには、各地からの研修生や将来的に農業を志す若者たちが所属していて、取材当日もタマネギ畑の草取りに汗を流していた。

「いやあ、今日はエラいしんどかった

成立。連日コーナーを設けて計画的に出荷するようになった。

その試みがすぐぶる好評で、他の店舗でも扱いたいということに。それではとても量が足りないのでは、近隣の仲間呼びかけてグループで出荷することになる。そうして「神出有機栽培グループ」を設立。栽培方法を互いに教え合い、協力しながら現在では関西圏の大丸21店舗に出荷するまでとなる。一戸の農家ではとても捌ききれない量だが、仲間を作ることによってパワーアップできた。

農家が消費者と直につながって、野菜を販売したとしても、販売経路はなかなか広がらない。

「農協と、中央市場と、仲買さんを通じて大丸に買ってもらって、余った分は他のスーパーへ。そういう経営がしつかりできないと。農家が農業で食べていかなければ、経営とはいえない」
単作の大産地と違い、西馬さんたちは、毎日少しずつ種を蒔き、できた分を日々出荷するという体制。それも多品種栽培で、土をぐるぐる回す農法だから、メンバー全員が同じように「ぐるぐる」と栽培して出荷していけば、自ずと売り場には、バラエティ豊かな作物が並ぶシステム。
「うまいやり方やろ」

と、きむ子さん。全くである。

お母ちゃんにしかできないこと

さて、きむ子さんの「モヤモヤ」はその後どうなったかというところ……知り合いに、子どもがアトピーで悩んでいるお母さんがいた。近所で売っている野菜はどれも食べさせられない。きむ子さんは、そんな彼女の車のトランクいっぱい野菜を詰めて見送ったという。

食べきれない野菜を近所に配ったところ、「とにかくおいしくて、しかも安心や」という評判が立ち、定期的にグループで購入したいという人たちが現れた。それではとても西馬さんの畑だけでは賄いきれない。それを正さんに相談すると、

「神出有機栽培グループのお母ちゃん同士でグループを作ればいい」
とアドバイスしてくれた。こうして

誕生したのが「ヘルシー・ママ・SUN」である。しっかりとした経営基盤となる「ハード面」の農業を支えるのがお父ちゃんたちなら、消費者とより密接な関係を保ち、生産者の思いや農業の魅力を伝える「ソフト面」を担うのはお母ちゃんの役目。きむ子さんはここに「モヤモヤ」の捌け口を見いだした。

「これまで生産者と消費者の交流といえば、男性対女性のつながりだった。

お父ちゃんたちは野菜を『商品』としてしかものが言えない。自分は経営しているから、自分の商品を買ってほしいという思いで交流する。でも、それがお母ちゃんになって、女性が女性と話し合うということは、同じ野菜が家族を守り育てる『食料』になる。女同士がつながること、農業の見方が変わって来る。そうして自分の持ち場、持ち場で能力を発揮していくのが、私はパートナーやと思っている」

「ヘルシー・ママ・SUN」が誕生したことで、きむ子さん同様これまで燻っていた思いを発散させる場を見いだしたメンバーも少なくない。「グランメール」設立に当たり、一人30万円ずつ出資し、有限会社を設立。責任もやり甲斐もみんな一緒だ。

あの震災の時は、被災地の消費者に向けて「いつもは30分のところ、6時間かけて」野菜や水、コンロなどを積み、救援物資を運び込んだ。そんな「心の救援」ができるのも「ママ・SUN」ならでは。この時、都市の近くで農地を守っていくことの大切さを実感したという。

現在は、グランメールの



朝市（背中を向けた割烹着姿がきむ子さん）。毎週日曜日、神戸市農業公園で開かれる「朝市」は市民に大人気。お客さんからも「お母ちゃん、これちょうだい」の声がボンボン飛び交う。

設立1周年のイベントに向けて張り切っている。「都会の暮らしに疲れた人が、ふらっとグランメールへやってきて、部屋でゴロンと休んでる。私が畑から上がってきたら『あらー、来とったのー』。ここがみんなのそんな場所になればいい」

きむ子さん個人のパワーもさることながら、「ママ・SUN」たちが集ったことで、可能性はますます広がった。頼もしい「お母ちゃん」たちがいつも賑やかに寄り合っている「グランメール」から、今後新しい展開がどんどん生まれていくに違いない。